
H A P P Y L I F E

宮風 りんご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H A P P Y L I F E

【Nコード】

N 5 6 3 4 A

【作者名】

宮風 りんご

【あらすじ】

「昨日のことさア…」「誰にも言っていないですっ！…」なんにも聞かれてないのに答えてしまった…。「そう。…でさ、あれは既成事実として…」ん？「付き合おうか。」「…え？」「既成事実。すでに起こってしまっつて、変えることのできないたしかなできごと。」そんな、既成事実の意味なんて聞いてない。腹黒クラスメイト×天然…？のラブコメディ。

第1話

「あつ、教室に体操服忘れてきた！」

「力エ、遅いよ…。ここまできてから気付く？」

ここは、自転車小屋。生徒玄関から出てしばらくしたところにある。

「…しょうがない。待っててあげるから、はやくね！」

「ありがとー！スグ行ってきますー！！優ちゃん、メグちゃん！」

わたしは急いで教室に向かった。

あ…

教室のドアをあけると、机につぶして寝ている人物がいた。

日野くんだ。

席が一回横になったただけで喋ったこともないから、日野くんのこと
はあんまり知らないんだけどね。

でもカッコイイしテストの番数は一から下に下がったことがないし
っていうので、かなり有名。

…起こさないようにしないと。

わたしはそつと自分の机に向かう。

ガタガタッ

「ギャーーーーー!!」

日野くんの横を通り過ぎようとした瞬間、わたしは大きな音と声を出して何かにつまづいて転んでしまった。

その騒音に反応したのか、日野くんが顔を上げる。

「あの、ごめん、起こしちゃって…。」

「……ウルサイ。」

急に制服のリボンが引っ張られた。

「…え?」

わたしは両腕をつかまれ、無理矢理キスをされてしまう。

「ん…んっ!？」

引き離そうとするが、男の力には敵わなかった。

それから数秒間、キスは続けられた。

「ぶはっ!」

「……」

「な、に、す……っ」

わたしはそれ以上何も言えなかった。

「「……………」」

2人で沈黙。

わたしは自分の机まで走って体操服を入れた袋をとり、教室から出た。

ふぁーすときす、なんですけど…。

「遅いよー！何してたの？カエ。」

「ゆ、ゆづちゃ…な、なにつて…。」

「「……………」」

「せ、せんせいにね。ちょっとね…！」

日野くんにキスされてました、なんて…言えないよ……………！！

「…？よく分かんないけど…………じゃあ帰ろっか。」

わたしはいつものように帰りに3人で寄ったマックで変にどもりまくって……………

2人にもものすごくいぶかしがられたのだった。

明日…学校行きたくないよおお……………。

どうか、日野くんに話しかけられませんかように…っ！！

「ごめん、ちょっといい？榎本さん。」

よくないよ、日野くん…。

今日は朝からずっと日野くんと目もあわさないように避け続けてきたのに…ついに（！？）昼休み、あちらから声をかけられてしまっ

た。

優ちゃんとメグちゃんは、目を見開いてビックリしている。

確かに…今までわたしと日野くんは喋ったこともないハズなのに、いきなり喋ってるからね…

「いや、今は…。」

今どころか一生ムリです。

「ほんの少しでいいんだけど…ダメ？」

「うつ…じゃあ、ハイ…」

押しに負けてしまった…。(たいしておされてもないけど…)

わたしは黙って日野くんについてゆく。

着いた所は、誰もいない学習室だった。

「昨日のことさア…」

「誰にも言っていないですっ！！」

なんにも聞かれてないのに答えてしまった…。

「そう。…でさ、あれは既成事実として…」

ん？

「付き合おうか。」

「…え？」

「既成事実。すでに起こってしまって、変えることのできないしかなできごと。」

そんな、既成事実の意味なんて聞いてない。

「…ごめんなさい、むりです。」

「何が？」

や、笑顔で「何が？」と言われても…付き合うことが無理なのです…。

「昼休み、もうすぐ終わるな…。じゃあこれからよろしく、華苗。」

カナエ…？

なんで、名前で呼び捨て……………？

…これからよろしく？なににですか？！

わたしはチャイムになるまで、呆然と学習室に立ち尽くしていた。

第1話（後書き）

初投稿でした。感想等お待ちしております。

第2話

「華苗、帰ろうか。」

ザワツ…

「っえ…!？」

「何、カエ！日野くと付き合うことになったの!？」

「かなちゃん、あたしそんなハナシ、聞いてないんだけどなア」

「いや、違…「うん、僕たち付き合うことになったんだ。」

…はいっ!？」

「「「えーーーーー!？」」」

クラス騒然。

って！

「僕」…!？いま自分のことをボクって言いました…!？学習室では「俺」でしたよね…!？」

それで、「ボクたち」って……

日野くんと、だれ…？

わたし！？

あ、ありえないっ……！

わたしが言葉をなくして固まっていると、日野くんはクラスのみんなにこやかに「バイバイ」とか言いつつ……わたしの手をつかんで教室から引きずり出した。

わたしは……優ちゃんとメグちゃんと帰るのに……っ！

マック行っちゃってたのに――！！

「ひのくんっ！」

「なに？」

「わたしと日野くん、いつのまに付き合ったのかなあ……？」

「……………」

質問に答えてくださいー！

…今、わたしは日野ちゃんと自転車に乗っている。

日野くんは自転車通学じゃないから、何故かわたしの自転車で二人乗り。

日野くんはわたしの家と正反対の方向へ自転車を進めていた。

自分の家に帰るのかな？

……………わたしの自転車で。

「ついたよ。」

日野くんが自転車をとめたところは、公園だった。

「学生のデートといえば、公園、みたいな。」

デートッ…!?

わたしと日野くんは、付き合ってるのですか？

ううう…。

「あ、オイ、華苗。」

「…はい？」

日野くん、キャラ違うっ…。

「明日から…「華苗ッッ」」

へ…？

別の方向から声が―…わたしの名前を呼んでいる。

名前を呼ばれた方向を見てみると、裕鷹が車から出てものすごい形相でわたしたちのところに向かってきた。

あああ…。裕鷹には、裕鷹にだけは男の子と一緒にいるところは見られちゃいけなかったのにつ…!!

裕鷹は、わたしの兄。

すごいシスコンで有名…らしい。。

「「「……………」」」

「裕鷹、なんでここに？」

… 大学が休みの期間だとか言ってたっけなああ…。

「華苗が… 男と自転車で二人乗りしているとの目撃証言があつて…
！！」

「あは… 誰、それ。」

裕鷹にそんな情報を… っ！！

ていうか、な、なに… ！？

二人とも、ファンが見たら泣いちゃうよ……………。

日野くんも裕鷹もファンクラブがあるほど人気があるのだ。

その二人が、今にも殺し合いそんな雰囲気で見合っている。

こわい、こわすぎるっ…。

「… 華苗、帰るぞ。」

「でも… 自転車…。」

「明日コイツが学校に乗ってこればいい。オレの車に乗れ。はやく。明日の朝も送っていつてやるから。」

「あー、うん…。」

裕鷹があまりにもこわい顔でせかすので、わたしは急いで車のドアをあけて車に乗り込んだ。

「おまえ、もう華苗に近づくなよ……？」

「……………」

裕鷹「なに言ってるのー！！」

日野くん、こわい、こわい！！！！その顔はやめてーっ！！

大体、日野くんとわたしは同じクラスだし……近づかないのは無理だよーっ……。1

第3話

…今日も（あたりまえだけど）来てしまった、学校…。

自転車小屋にはまだわたしの自転車はなかった。

昨日は日野くんを一人（いや、わたしの自転車と一緒に）取り残して裕鷹の車で帰っちゃったし。

怒ってるかなあ…。

「力エ！」

「あ、優ちゃん。おはよう」

「おはようじゃないわよっ！どーゆーことよ！」

「…なにが？」

意味不明発言をする優ちゃんに問掛けた瞬間、メグちゃんが勢いよくドアを開けて教室に入ってきた。

「カナちゃん、ものすっごい噂になってるわよ！」

…なにが！？なんの！？

「日野くんという人がいるってのに…。」

優ちゃんがわたしに向かって呆れた風にそう言った。

??日野くん？

「今日カナちゃんさ、どうやって学校にきた？」

メグちゃんがニヤニヤしながらわたしに聞いてきた。

「車、だけど…」

「やっぱりホントの話だったんだ！」

ニヤニヤ笑いを深めるメグちゃん。

「カエ…。」

さつきより一層呆れましたという顔でわたしの名前を呼ぶ優ちゃん。

いやふたりとも、車で来たくらいでなに…?!

そう思ったとき、優ちゃんがつつむきながらすごいことを言ってくれた…。

「すごいカッコイイ人の車からカエがおりてきたとか。それで、そのカッコイイ人にカエが学校に入る間際『愛してるよ』とか言われてたとかって噂は、ホントだったんだね…。」

「えええええええっ!?!」

それが【噂】!?!

事実だけどっ！！

ちがう、違うのおお…。裕鷹は兄、だし…

まさか、まさか見られていたとは…！！！！

「裕鷹は…」

「えーっ！その人ゆたかつて名前なの？呼び捨てえ？…ってゆうかあたし達、カナちゃんから聞いてなかったよ…その人のことも、日野くんのことかも！」

「友達でしょ？言ってくればよかったのに。」

「いや…」

相談もなにも…。

うわあ、こんがらがってきたあ…。

「二股なんてヤルわね、カナちゃん！…でも今日で日野くんの方に二股バレちゃったんじゃない？」

…二股もなにも、日野くんとも付き合っていないような…。いや、付き合ってるのか！？

「でも、二股はよくないわよ。ちゃんとどっちかに決めなきゃ…っ、あ。」

優ちゃんがわたしの後ろの方を見て、固まった。

メグちゃんもその方向を見る。すると、優ちゃんと同じように固まっ
てしまった。

「メグちゃん、優ちゃん…？」

…嫌な予感。

「おはよう立花さん、林さん、…華苗」

立花さんはメグちゃんの名、林さんは優ちゃんの名…で、この
学校でわたしを『華苗』なんて呼ぶ人は…！！

わたしは勇気を振り絞って、後ろを見た。

「日…野、くん。」

そこには、いやというほどニコニコした日野くんがいた。

こ、こわいー！！

「ちょっと、いい？」

…日野くんがわたしを『ちょっといい？』といって呼び出すとき、
いいことがあるとは思えない。

「うん、なに？ここでもいい？」

ここなら他の人もいるし、安全だし…っ！！

「いや、ここじゃなんだし…学習室、行こうか。」

うわあ、笑顔、四割増してるよ…。

…逆らわない方が身のためかもしれない…。

わたしは優ちゃんとメグちゃんに力無く微笑んで、日野くんの後にトボトボとついていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5634a/>

H A P P Y L I F E

2010年10月19日02時29分発行